叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharma-parvan 和訳研究（XV）[1]—

茂木秀淳

［２２０章］（＝D．２２７章、8212-8332）
ユディシュティラは言った。

(1)　ひどい不幸に沈んだ人間にとって好ましきものは (śreyas) 何か。親族を失った時、大地の守護者よ、また王国を失った時には (何が好ましきものなのか)。

(2)　貴方は、我々にとって、この世界における最高の語り手である、バーラタ族の雄牛よ。このことを私は尊き貴方に尋ねる。それを私にここで語るべし。

ビーシュマは言った。

(3)　息子や妻、安楽、そして財産を失い、ひどい不幸に沈んだ者にとって、好ましきものは堅忍である[2]、王よ。(cf. Böhtlingk, Indische Sprüche, No.4108)

(4)　堅忍を備えたよき人の身体は[3] 衰えない。身体が健康であるから、彼は再び幸運 (śrī) を得るのである[4]。(cf. Böhtlingk, Indische Sprüche, No.3172)

(5)　よき振る舞いに (sāttvikīṃ vṛttim) 住する人々の王には[5]、堅実さ[6]、堅忍そしてもろもろの行為における決断がある[7]。

(6)　ここでも人はこの古譚を語る。再び、バリとヴァーサバの対話を、ユディシュティラよ。

(7)　神々と悪魔の戦いが終わり、ダイトヤとダーナヴァが滅亡し、ヴィシュヌ神が世界を歩き廻り[8]、百の祭式を行なう者（インドラ）が神の王となり、

(8)　神々が祭られ、四種のヴァルナが確立され、三界は栄え、自存者は歓喜した時、

(9)　ルドラによって、ヴァスによって、アーディトヤによって、アシュヴィン双神によって、聖仙たちによって、ガンダルヴァによって、大蛇によって、シッダによって、そして他の者たちによって囲まれ、威光ある者インドラは、

---

[1]本稿は『叙事詩の宗教哲学– Mokṣadharma-parvan 和訳研究 (XIV)–』(信州大学教育学部研究紀要第 98 号 1999 年 12 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿から用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[1902]-2: Hopkins,E.W., *Phrases of Time and Age in the Sanskrit Epic*, JAOS vol.23, pp.350-357, 1902.
- Hara[1980]: Minoru Hara, *Hindu Concepts of Teacher, Sanskrit Guru and Ācārya*, Sanskrit and Indian Studies (Essays in Honour of Daniel H.H.Ingalls), pp.93-118, 1980.
- Hara[1996]: Minoru Hara, *Śrī—Mistress of a King*, Orientalia Suecana, vol.XLV-XLVI, pp.33-61, 1996-1997.

[2]dhṛtir　Ca. dhṛtir vivekajñānam
[3]P. dhairyeṇa yuktasya sataḥ śarīraṃ　D. dhairyeṇa yuktaṃ satataṃ śarīraṃ
[4]P. ārogyāc ca śarīrasya sa punar vindate śriyam　D. は、この句の次に、
　　viśokatā sukhaṃ dhatte dhatte cārogyam uttamam //
を挿入している。従って、P.4cd 句は D.5 の ab 句となる。
[5]P. yasya rājño narās　D. yac ca prājño naras
[6]P. tasya sthairyaṃ　D. tasyaiśvaryaṃ
[7]vyavasāyaś ca　Cs. vyavasāyo nirṇayaḥ
[8]viṣṇukrānteṣu lokeṣu　Viṣṇu と krānta の結合については、Gonda[Aspects] p.56 参照。

(10) 四本の牙をもち、よく調御され、幸運 (śrī) を伴なう、すぐれた象アイラーヴァタに乗って、三界を巡行した。

(11) 彼の金剛を持つ者は、ある時、海岸のとある山のほら穴で、ヴィローチャナの息子バリを見つけ、近づいた。

(12) そのアイラーヴァタの背に乗り、神々の群れに囲まれた神の王インドラを見て、ダイトヤの王は、悲しむこともなく動揺することもなかった。

(13) 顔色も変えず、恐れることなく立っているバリを見て、すぐれた象に乗った百の祭式を行なう者は、次のように言った。

(14) ダイトヤよ、汝は動揺しない。それは、勇敢さのためか、あるいは長老に対する尊敬のためか、あるいは苦行によって生じた力 (tapasā bhāvitatvād vā) のためか。いずれにせよ、これはきわめて為し難しいことである。

(15) 汝は、敵の支配下に入り、最高の地位から追放された。ヴィローチャナの息子よ、どうして汝は悲しむべきことに悲しまないのか。(cf.MBh.XII.215.11, 219.3)

(16) 自分の種族の最高位を獲得し、この上なき楽しみを享受した後[9]、財産・力・王位を奪われた汝は、なぜ悲しまないのか、それを私に語るべし。

(17) かつて、父と祖父の地位を支配する者 (īśvara) となり、今やそれを敵どもに奪われたのを見て、汝はなぜ悲しまないのか。

(18) ヴァルナの縄によって縛られ[10]、金剛によって打ち倒され、妻を奪われ、財産を奪われたのに、語るべし、汝はなぜ悲しまないのか。

(19) 幸運は落ち[11]財産はなくなったのに、汝が悲しまないというのは、為し難きことである。実に三界の王位を失った時、他の誰が生きるのに耐えられようか。

(20) あれこれと (etac cānyac ca) 辛辣に語る者を無視しつつ、彼の言うことを心地好く (sukham) 聞いた後で、迷うことなく、ヴィローチャナの息子バリは言った。

(21) ひどく抑圧された私にとって (nigṛhīte mayi)、インドラよ、汝の語ることが何になろうか。私には、金剛を振り上げて立っている汝が見えるのである、城砦の破壊者よ。

(22) かつて力のなかった汝は、どうにか (kathaṃcit) 力を得たにすぎぬ。汝の他の誰がこの無慈悲な (sukrūrā) 言葉を語ることができようか。

(23) しかし、支配された、(いやまさに) 手中に落ちた手強い敵に対して、力はあっても慈悲をなす者、彼こそを人々は男と呼ぶのである。(cf. Böhtlingk, Indische Sprüche, No.5338(4834))

(24) なぜならば、戦闘において戦っている両者にとって (勝敗は) 決まっていないからである。一方が勝利を得、他方が敗北する (にすぎない) のである。

(25) こ (の現在の状態) が、汝の自性 (svabhāva) ではありえない、ダイヴァタの雄牛よ[12]。(現在) 一切の支配者 (たる汝) は、(いずれ) 私の勇敢さによって、力づくで征服されるであろう。

(26) 金剛を持つ者よ、汝がこのようになり、また我々がこのようになったのも、我々が為したからではない、インドラよ。また、汝が為したからでもない。

(27) 私はかつて今日の汝のようであった。汝は将来、現在の我々のようになるであろう。汝は私のした行為を、悪しく為された、よく為されたと、蔑んではならない。

---

[9]P. bhuktvā bhogānuttamān D. mahābhogānuttamān

[10]vāruṇaiḥ pāśair baddhā 「ヴァルナの縄」については、Hopkins[Epic Mythology] pp.119-121, A.A.Macdonell, Vedic Mythology, Strassburg, 1897, p.26 参照。この語の用例については、京大人文研共同研究井狩班「インド文化史の諸問題」レジメ (1998 年 12 月 4 日)MBh.XII.96.20 注 (山下勤氏担当分) に指摘されている。

[11]P. bhrastaśrīr D. naṣṭa-

[12]P. 'yaṃ mayā daivatapuṃgava D. 'yam iti te devapuṅgava b 句の mayā(D. にはこの語はない。) が修飾する語がはっきりしない。ここでは、d 句の jito に関連させて理解した。

(28) 人は、時の進行によって、楽と苦を獲得する。時の進行によって、汝はインドラたることを得たのである。インドラよ、(汝の) 行為によって得たのではない。

(29) 時が、時の中で、私を導くのである。汝もまたこの時が導くのである。このために、私は、今は汝のようではなく、また汝も今の我々のようではないのである。

(30) 人に安楽をもたらすのは、父母に従順であることでもなく、神々を祭ることでもなく、また他の徳の実践でもない。

(31) 知識も、苦行も、布施も、友人も、親族も、時によって苦しめられている人を救うことはできない。

(32) 人は、認識の力がなければ、何度防いでも、将来の災難を追い払うことは[13]できない。(cf. Böhtlingk, Indische Sprüche, No.3543)

(33) 時の進行に襲われている人には救済者はいない。インドラよ、私が行為者である、と (誤って) 考えることが苦なのである。(cf.MBh.XII.219.13)

(34) 行為者がいるとするならば、行為者は決して創造されることはない。しかし (実際は)、行為者は創造される[14]のであるから、行為者もまた (行為の) 支配者 (īśvara) ではないのである。

(35) 時によって、私は汝に勝利し、時によって、汝は私に勝利したのである。もろもろの進行する者たちを進ませるのが[15]時である。時が生き物を駆り立てるのである (kalayati)。(cf. Hopkins [Great Epic] p.103.fn.3.)

(36) インドラよ、汝は、粗雑な認識で喋っているが[16]、(このことを?) 理解していない。汝が、自分の行為によって卓越性を獲得しても、尊敬するのはわずかな人々である。

(37) 世の動きを[17]知っている私のような者は、時に打ちのめされても、どうして、対象を誤って[18]、嘆き迷うことがあろう。

(38) 常に時に取り囲まれている私、あるいは私に匹敵する者の認識は、災難に出会った後に、壊れた船が沈むように、消滅するであろうか。

(39) 私も、汝も、そして他に神の長になるであろう者、これらすべての者は、インドラよ、百のインドラが通った道を行くであろう。

(40) 最高の幸運によって輝く極めて近づき難き汝でさえも、時が熟せば、時は、私を連れ去ったように連れ去るであろう (kālayiṣyati)。

(41) ダイティヤ族の何千というインドラが、何ユガとなく、時の経過によって過ぎ去ったのである。しかし (hi)、時 (そのもの) は越え難いのである。

(42) 汝は、この地位を得て、自分を高く考えている。あらゆる生き物を生じさせる永遠の神ブラフマーのごとく (自分を考えている)。

(43) この地位はだれにとっても不動にして終わりなきものではない。しかし、汝は、子供のような意識によって、「これは私のものである」と考えている。(cf.MBh.XII.217.28)

(44) 汝は、信頼できないものを信頼し、永遠でないものを永遠であると考えている[19]。「これは私のものである」という迷妄によって、汝は王の幸運を望んでいる。

(45) これは、汝にとっても、私にとっても、そして他の人にとっても、変らざる状態とは考えられない。これは、他の多く（の状態）を過ぎた後、ある期間における汝の状態なのである。

---

[13]prativyoḍum Ca. prativyoḍum iti voḍhum iti vā chāndasaṃ prativyūhitam ity arthaḥ

[14]kriyate Ca. kriyate, īśvareṇa karmaṇi preryate

[15]gantā Ca. gantā gamayitā

[16]P. pralapan D. pralayaṃ

[17]lokapravṛttaya(ḥ) Ca. lokapravṛttaya iti vibhaktivyatyayaś chāndasaḥ

[18]P. arthasaṃbhrame D. atha vibhramet P.「意味を混乱して」か。

[19]D. はこの後に次の句を挿入し、三行詩としている。

nityaṃ kālaparītātmā bhavaty evaṃ sureśvara / (「常にこのように、本質的に時に囲まれているのである、神の主よ」)

(46) 少しの間、その不安定なものは汝に留まった後、ヴァーサヴァよ、牛が水飲み場を[20]去って再び別の水飲み場へ行くように、他に行くであろう。

(47) 私には数えあげることができない王の世界が過ぎ去った。汝の後に、より多くの他の（王の世界が）あるであろう、城砦の破壊者よ。

(48) 木、植物、宝を伴い、海、山、鉱山をもった[21]大地をかつて享受した者たちを、今、私は見ることはない。

(49) プリトゥ[22]、アイラ、マヤ、バウマ[23]、ナラカ、シャンバラ、アシュヴアグリーヴァ、プローマン、スヴァルバーヌ、アミタドヴァジャ、

(50) プラフラーダ、ナムチ、ダクシャ、ヴィプラチッティ、ヴィローチャナ、フリーニシェーダ[24]、スホートラ、ブーリハン、プシュパヴァン、ヴリシャ、

(51) サトヤェーシュ、リシャバ、ラーフ、カピラーシュバ、ヴィルーパカ、バーナ、カールタスヴァラ、ヴァフニ、ヴィシュヴァダンシュトラ、そしてナイルリタ、

(52) リタとアーフッタ、ヴィーラとタームラ、ヴァラーハーシュヴァ、ルチ、プラブ[25]、ヴィシュバジット、プラティシャウリ、ヴリシャーンダ、ヴィシュカラ、マドゥ、

(53) ヒラニヤカシプ、そしてカイタバ、ダーナヴァ、ダイティヤ、カーラカンジャ[26]、ナイルリタと共に、これらすべての者、

(54) そして以前の、またさら以前の、これらや他の多くの者、ダイトヤの王たち、ダーナヴァの王たち、そして他の者たちについても、私は聞いている。

(55) 多くのかつてのダイトヤの王たちは、大地を捨てて去った。すべては、時に打ち負かされたのである。時の方が力強き故に。

(56) 百の祭式を行なう者(インドラ)すべてによって、祭式は行なわれたのである。汝一人が百の祭式を行なう者ではない。すべてが、ダルマに専念し、すべてが常にサットラ祭を行なったのである。

(57) すべてが中空を飛び、すべてが接近して戦ったのである (abhimukhayodhin)。すべてが武器をもち、すべてが鉄の腕を持っていたのである。

(58) すべてが百の幻術をもち、すべてが欲するままに振る舞い[27]、戦闘に参加して、打ち負かされた者は伝えられていない。

(59) すべてが真実の誓約に専心し、すべてが欲望のままに歩き、すべてがヴェーダの誓約に専心し、すべてが多聞であった。

(60) すべて自在な者にして、確固とした[28]支配者性を獲得したのである。従って、この支配者性は彼ら偉大な自己を持つ者たちにとって、以前からあったものではない。

(61) すべて正しき布施者であり、すべて利己心なき者であり、すべて、すべての生き物に対し適切に振る舞ったのである。

(62) プラジャーパティの後裔であり、大きな力あるダクシャの息子たちはすべて、輝き熱を発していたが、時によって奪い去られたのである。

---

[20] P. nipānam D. nivāsam 「牛と水飲み場」の比喩は MBh.XII.252.14 にも用いられているが、そこも nipānam が用いられている。

[21] P. sasaritparvatākarā D. sahasattvavanākarā

[22] pṛthur Cs. pṛthur nāma kaścid asuro, na vainyaḥ

[23] P. bhaumo D. bhīmo

[24] P. hrīniṣedhaḥ D. hrīniṣevaḥ

[25] P. rithāhutthau vīratāmrau varāhāśvo ruciḥ prabhuḥ D. saṃkoco 'tha varītākSo varāhāśvo ruciprabhabhuḥ

[26] P. daityāś ca kālakhanjāś D. daityā dānavāś

[27] P. kāmacāriṇaḥ D. kāmarūpiṇaḥ

[28] P. saṃhatam D. saṃmatam

(63) 汝も、この大地を享受した後、再び捨てるであろう。その時、汝は、自分の悲しみを抑えることはできないであろう。

(64) 欲望の享受への望みをを捨てよ。この幸運より生じた自惚れ (madam) を捨てよ。そうすれば、自らの王位が滅した時[29]、汝は悲しみに耐えるであろう。

(65) 汝は、悲しい時に悲しんではならぬ。喜ばしい時に喜んではならぬ。過去と未来を捨てて、現在あるものと共に生きるべし。

(66) もし時が、常に専心し怠惰ならざる私に至ったのであれば、耐えるべし、インドラよ、(時は) 遠からず汝にも近づくであろう。

(67) 神の主よ、汝は、脅しつつ、ここで私を言葉によって切り裂くかのごとくである。今は私が自分を抑えているので、汝は自分を偉大であると思っている。

(68) 時は、まず私に近づき、そしてその後[30]汝に走りよったのである。だから汝は、神の主よ、私が先に時によって殺されているので、大声をあげられるのだ 。

(69) 怒った私との戦いにおいて、一体誰がこの世に留まることができようか。しかし、力ある時が (汝に) やって来たのである (prāptas)。だから、汝は、ヴァーサヴァよ、立っていられるのだ。

(70) 千年を終りとするものは、(いずれ) 満了せねばならない[31]。健康でなく力奪われた[32] 私のすべての手足のように。

(71) 私は、力ある地位から追放され、(今や) 汝インドラが天において、主たるもの (prakṛto) である。(そして汝が) この種々の生き物の世界において (sucitre jīvaloke) 崇拝されるとすれば、それは時の進行の故にである。

(72) 汝は何を為して後、今インドラであるのか。我々は、何を為して後、追放されたのか。行為者であり、変化を引き起こすものは時である。他のすべては原因ではない。

(73) 消滅・破滅[33]・自在者性・楽と苦・有と無（は時が原因である)。賢者は、このように完全に（atyartham）理解した後、喜ぶべきでもなく、悲しむべきでもない。

(74) インドラよ、汝は我々をすでに知っているし、我々も汝をすでに知っている。(それなのに今？）汝は、どうして私を時に束縛されていると非難するのか[34]、恥なき者よ。

(75) 汝は、当時の私の男らしさ、戦闘における勇敢さを充分に示すものをかつてすでに知っている。

(76) アーディトヤ、ルドラ、そしてヴァスともにサードヤ、そしてすべてのマルト神群は私によって打ち負かされたのである、シャチーの王よ。

(77) インドラよ、汝はまさしく知っていよう。神々と悪魔の戦いにおいて、集まった知恵ある (神々は)、戦闘においてすぐに私に打ち砕かれたことを。

(78) 斧のような頂上をもつ[35] 恐ろしき山々が、森と森の住人と共に、戦闘中何度も汝の頭に私によって投げられたことを。

---

[29]svarājyanāśe「財産と王位が滅した時」か。

[30]prathamaṃ āyān māṃ paścāt tvām anudhāvati　この「まず (prathamam)、そしてその後 (paścāt)」という表現について、Hopkins は、「序数が時を表す場合」の例として言及している。(cf.Hopkins[1902] p.123.)

[31]P. pūrṇaṃ　D. tūrṇaṃ　Hopkins は、「神の寿命」を論じ、この箇所を「(ヴェーダの) 神の寿命はわずか千年」の例として言及している。(cf.Hopkins[1903] p.43.)

[32]P. nasvasthāni hataujasaḥ　D. nasusthānāni mahaujasaḥ

[33]nāśaṃ vināśam　Ca., Cs.: nāśam adarśanaṃ vināśaṃ vidhanam (Cs. atyantocchedo vināśaḥ)

[34]P. vikatthase māṃ kiṃ baddhaṃ kālena　D. kiṃ katthase māṃ kiṃ ca tvāṃ kālena

[35]saṭaṅkaśikharā　Ca. saṭaṅkaśikharāḥ ṭaṅkacchinnavad agamyaśikharavantaḥ

(79) しかし越えがたい時が行なうこと何でも[36]、私がどうしてできようか[37]。(しかし) 私は、汝が金剛をもっていたとしても、必ずや汝を拳で殺すであろう[38]。

(80) しかし、今は勇気の時ではない。忍耐の時が来ているのである。それゆえ、汝より耐えるのが困難になっている[39]としても、私は汝に耐えるのである。

(81) インドラよ、汝は、時が移ったので (pariṇate) 時の炎によって囲まれ、時の縄によって捕らえれ縛られた私を嘲る。

(82) 世間にとって越えがたいこの黒い人[40]、ルドラの息子である彼が私を縛って立っているのである。あたかも家畜を紐で縛るかのように。

(83) 獲得と損失、楽、苦、欲望と怒り、有と無、殺害、束縛、解放というすべては、時によって獲得されるのである。

(84) 私が行為者ではなく、汝が行為者でもない。行為者は常に支配者たるこの時であり、それは私を熟させるのである (pacati)。木になった実を熟させるように。

(85) 人が、時によって安楽がもたらされるまさにそのことを再び行なっても、その人には時によって苦がもたらされるのである。

(86) 時を知る者は、時によって触れられても嘆くべきではない。だからインドラよ、私は悲しまないのである。悲しみの中に助力者 (sahāyatā)[41]はいない。(cf.MBh.XII.219.4)

(87) 悲しむ者の悲しみが災難を除かない時、悲しむ者には（悲しみを除く）力はない。それゆえ、私は今悲しまないのである。

(88) 千の目をもち、パーカを罰する至尊者であり (cf.MBh.XII.218.2, 272.28)、百の祭式を行なう者は、このように言われ、怒りを抑えて次のように言った。

(89) 金剛をもって振り上げられた腕、そして、ヴァルナの縄を見た後、この世で心 (buddhi) 震えぬ者が誰かいようか。殺さんと願う死（の心）でさえ（震えるであろう）。

(90) (しかし) 汝の不動にして真理を見る心 (buddhi) は震えることはない。汝は、言葉を話しつつ震えない、真理への勇気を持つ者よ[42]。

(91) 世界が去って行くのを[43] 見た後、身体を持つ者の誰が、世間において、財産や身体に信頼を置くことができようか。

(92) 私もまた、永遠ならざるこの世間が、このように恐ろしい、秘密の、そして常に動く不滅の時の炎の中に置かれていることを知っている。

(93) この世では、時に触れられた者は誰も (時から) 逃れることはできない。小さな生き物も、大きな生き物も成熟する限りは[44]（逃れることはできない)。

(94) 支配されることもなく、狂うこともなく、常に生き物を成熟させ、停止することなき時が到達した時、そのものは消滅から解放されることはないのである。

---

[36]P. yat kālo duratikramaḥ D. kālo hi duratikramaḥ

[37]P. kiṃ nu śakyaṃ D. kiṃ na śakyaṃ

[38]na hi tvāṃ notsahe hantuṃ Hopkins は、この二重否定を、強調のため用いられた the affirmative double negative の例とし言及している。(cf.Hopkins[1902]p.119.fn.1.)

[39]durmarṣaṇataras tvayā Hopkins は「比較の対象を instrumental で表す例」として、この箇所に言及している。(cf.Hopkins[1902] p.131.fn.1.)

[40]sa puruṣaḥ śyāmo Ca. kālasya śyāmatvaṃ bandhanasāmarthyād ugratvadyotakam, na tu varṇaḥ śyāmas tathā

[41]具体的にどのような人物が sahāya としてふさわしいかについては、京大人文研共同研究井狩班「インド文化史の諸問題」レジメ (1998 年 12 月 4 日)(山下勤氏担当分) 注 p.1 に MBh.XII.84.2, Manu Smṛti 7.30,7.31, Arthaśāstra 1.7.9 が言及されている。

[42]P. bruvan na vyathase sa tvaṃ vākyaṃ satyaparākrama / D. dhruvaṃ na vyathase 'dya tvaṃ dhairyāt satyaparākrama /

[43]saṃpraṣṭhitaṃ jagat Ca. saṃpraṣṭhitaṃ vinaśvaram

[44]sūkṣmāṇāṃ mahatāṃ caiva bhūtānāṃ paripacyatām Duessen: weder die sublichen, noch die großen Elemente, wenn sie in ihm Reife kommen.

(95) 酔うことなき時は、身体をもつ者 (dehin) が酩酊しても、その中で目覚めている。いかなる努力によっても時が打ち負かされたことは (atikrāntaḥ)、かつて誰にも経験されたことはない。

(96) 古くからの永遠の法則 (dharma) は、あらゆる生き物にとって等しい。（すなわち、）時からは逃れられず、そしてまた、この時 (そのもの) が過ぎ去ることもないのである。

(97) 昼夜、月、秒、カーシュター、カラー、ラヴァを[45]、時は我々に積み重ねるのである。高利貸が[46] 利子を積み重ねるように。

(98) 「今日はこれをしよう、明日は（これを）しよう」と言う者を、時はやって来て連れ去るのである。川の流れが筏を運ぶように[47]。

(99) 「今まさに[48]私が見たこの者がどうして死ぬのか」というように、時によって連れ去られる人々の嘆きが聞かれる。

(100) 財産は滅する。享受も地位も自在者性も同様である。一切は、無常で長続きしない。(この) 確信は得るのに難かしい[49]。（しかし、）成長は衰退を終わりとし、有は無の中にあるにすぎないのである[50]。

(101) そのような不動にして真理を見る汝の心 (buddhi) は震えない。「私は、かつてこのようであった」と、意識さえしないのである (manasāpi na budhyase)。

(102) より力の強い時に掴まれて、この世界が熟しつつある時、汝は、時に翻弄されて、誰よりも老い、誰よりも若いことを考えことはしないのである (na budhyase)。

(103) 世間の人は、嫉妬・自惚れ・貪欲に、欲望・怒り・恐れに、熱望・迷妄・自惚れに執着し迷うのである。

(104) しかし、存在（?bhāva）の真実を知り、知識と熱力を備えた賢者たる尊者は、たいへんはっきりと時を観察する。手の平のマンゴーを観察するかように。

(105) 時の振る舞いの真理を知り、あらゆる聖典に精通し、ヴィローチャナの息子として (?) 自己を完成した[51]汝は、賢者たちにとって願わしい存在である。

(106) 私が思うに、この一切の世界は、汝によって理性によって把握されている。完全に解脱した汝は、歩きつつも、どこにも心を留めることはない。

(107) ラジャスもタマスも、感官を制御し、喜びを離れ、苦を滅した汝に触れることはない。汝は自己（アートマン）に近づいたのである。

(108) あらゆる生き物に親切で、敵意なく、心の静まった汝を見て、私には、汝に共感する思い (anukrośiṇī matiḥ) が生じた。

(109) 私は、束縛の中にいるこのような覚者を[52]殺すのを望まない。慈悲 (ānṛśansyam) は最高のダルマである。そして汝に対する共感も[53]（最高のダルマである）。

(110) 汝にとって、これらヴァルナの縄は、時が経つうちに臣下たちがいなくなることによって (?)[54]解放されるであろう。汝に幸いあれかし、偉大なアスラよ。

---

[45]P. kalā lavān　D. lavān kalāḥ　「時の単位」及びこの詩節で用いられた高利貸しの比喩は、Hopkins[1903]p.11 に言及されている。

[46]vārdhuṣiko　Monier: vārddhuṣika　Apte: vārdhduṣika

[47]P. ivoḍupam　D. iva drumam

[48]idānīṃ tāvad eva　Hopkins: just now (cf.Hopkins[1902]-2, p.351.)

[49]P. anityam adhruvaṃ sarvaṃ vyavasāyo hi duṣkaraḥ　D. jīvitaṃ jīvalokasya kalenāgamya nīyate /　P. のこの句は、D. では 次の詩節の ab として用いられているに対し、D. のこの句は P. では見られない。

[50]P. bhāvo 'bhāvastha eva ca　D. bhāvo 'bhāvaḥ sa eva ca

[51]P. vairocane kṛtātmāsi　D. vivecane kṛtātmāsi

[52]buddhaṃ hantum icchāmi bandhane　Ca. buddhaṃ, utpannatattvajñānam/ bandhane, sthitam iti śeṣaḥ　Deussen: (bandhane) in Waffengange

[53]P. anukrośas tathā　D. anukrośaś ca me

[54]P. prajānām apacārena　D. prajānām upacārena　Deussen: indem deine Untertanen dir huldigen　D. の読みが理解しやすい。

(111) 嫁が年老いた姑を召し使いとする時、息子が、迷妄の故に、父をして (祭官を) 祭式に招かしめる時、

(112) 卑しき者共が、バラモンをして足を洗わしめる時、シュードラたちは、恐れることなく、バラモンの妻に近づく時、

(113) 男たちが、種々の母胎に精液を発する時、銅の器によって混合物を[55]、粗悪な入れ物によって供物を[56] (受け取る時)、

(114) そして四種の種性の境界がすべてなくなる[57] 時に、汝の縄は一つづつ[58]順に解かれるであろう。

(115) 汝には私からの恐れはない。定めを守るべし[59]。安楽をもち、障害なく、健康な心をもち、病なくあるべし。

(116) 彼にこのように言って、至尊にして百の祭式を行なう者は、象の王に乗って戻って行った。あらゆるアスラに勝利して、神の主は、幸いを喜び、唯一の王となった。

(117) 偉大な聖仙たちは、すぐに、あらゆる動くもの動かぬものの支配者であるヴリシャーカピ（猿の人）を讃えた。雪を除く者（火）は、自在者のために置かれた供物と甘露を急ぎ運んだ[60]。

(118) あらゆる所の優れた再生族によって称賛され、熱力によって輝き、怒りを去った自在者ヴァーサヴァは、心静まり、喜悦して、自分の住居であるトリヴィシュタパ天に達した後、満足したのである。

［２２１章］（＝Ｄ．２２８章、8333-8428）

ユディシュティラは言った。

(1) 我が王よ、将来幸運ある人の、そして苦しみある人の[61] かつての姿を[62]私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

(2) 心 (manas) こそが、将来幸運ある人とそして不運ある人のかつての姿を告げるのである。汝に幸いあれかし。

(3) ここでも人はこの古譚を語る。幸運の女神シュリーと[63]インドラの対話を。それを聞くべし、ユディシュティラよ。

(4) 偉大な苦行の果報によって[64]、上下の世界を見つつ、ブラフマンの世界に住む聖仙たちと等しくなって[65]、

(5) 限りなく輝く精力 (ojas) をもち、罪を滅し、偉大な熱力をもつブラフマー神[66]ナーラダは、三界を欲するままに動き回っていた。

---

[55]saṃkaraṃ kāṃsyabhāṇḍaiś Ca. kāṃsyaiḥ pānapatraiḥ / bhāṇḍaiḥ mṛtpātraiḥ Cv. kāṃsyabhāṇḍair bhojanapātrādikāṃsy abhāṇḍaiḥ / saṃkaraṃ nānāvarṇānām annadānādikam

[56]baliṃ cāpi kupātraiḥ Ca. kupātraiḥ bhojanapātrādyapavitrapātraiḥ, baliṃ devapūjām

[57]P. unmaryādaṃ D. amaryādaṃ

[58]ekaikas te tadā pāśāḥ kramaśaḥ pratimokṣyate この場合、pāśāḥは複数であるが、それを受ける動詞は、ekaikasがあるために、単数形となることは、Hopkins によって指摘されている。(cf.Hopkins[1902] p.131.)

[59]samayaṃ pratipālāya Deussen: bleibe nur deiner Bestimmung getreu Ganguli: Wait quietly

[60]P. udāvahaṃs tvaraṃs D. uvāha cādhvare

[61]bhaviṣyataḥ / parābhaviṣyataś caiva Ca. bhaviṣyataḥ kalyāṇaphalabhājaḥ / parābhaviṣyataḥ duḥkhabhājaḥ

[62]pūrvarūpāṇi Deussen: die früheren Daseinsformen Ganguli the premonitory symptoms Hopins[1902]: preliminary symptoms (p.123) 中村 [1998]: 前兆

[63]「幸運の女神シュリー」については、Hara[1996] 参照。

[64]vyuṣṭyā Ca. vyuṣṭyā phalena Cs. vyuṣṭyā kriyayā, prakāśanena

[65]sāmānyaṃ Ca. sāmānyaṃ samatvam Cv. samaṃ sahety arthaḥ

[66]P. brahmaivāmitadīptaujasaḥ D. brahmevāmita-

(6) (ナーラダは、) ある朝起きた後、清らかな水を浴びたくて、不動なる者の門より生じたガンジス川へ[67]行き、(川辺に) 降りた。

(7) 千の目をもち、シャンバラとパーカを殺した、金剛をもつ者 (インドラ) もまた、神仙によって好んで訪れられるこの岸に、まさにこの時、やって来たのである。

(8) 自己を制御し、低誦を為したこの二人は、沐浴した後、川の中にある細かな金の砂の島に達して、共に座った[68]。

(9) 語りに熟達し、清浄さを喜ぶ心をもつ二人は[69]、善き行為として知られ[70]、神仙によって語られた話を語り、過ぎ去ったかつての出来事を一心に語った。

(10) その時、光の網の中に上ってくる真ん丸の太陽を見て、二人は立ち上がって礼拝した。

(11) そして、その上ってきた太陽の近くに、別の太陽であるかのように、上ってきた (太陽の) 輝きに等しい輝きをもつ光が虚空に現れた (dadṛśe)。

(12) (その輝きは) 彼等二人の近くに達したのが見られた、バーラタ族よ。太陽光線の輝きによって運ばれ (?)[71]、ヴィシュヌの住居に[72] 達したそれは、光によって、較べるものないほどに輝き、三界を照らした。

(13) 神聖な美しい輝きをもつアプサラスに伴われ、高貴な太陽の輝きのように (cf.Gonda[Aspects] p.220.16)、高貴な光の姿をし、

(14) 星のごとき宝石を身につけ、恒星の連なりのごとき花輪をつけ[73]、蓮 (パドマ) の葉の上に立っているパドマーといわれる女神シュリーを、二人は眼前に見たのである。

(15) 女性の中でこの上なき者 (シュリー) は、最上の車から降りて、三界の主インドラと聖仙ナーラダに近づいた[74]。

(16) すぐにインドラは、ナーラダを従え、自ら自分を紹介するために、合掌して、彼の女神に近づいた。

(17) 一切を知る神の王インドラは、女神シュリーに対して較べるものなき礼拝をして、シュリーに次の言葉をまさしく語ったのである、王よ。

(18) 汝は誰か。いかなる目的のために来たのか、甘美に微笑む方よ。どこから来たのか、美しい眉をもつ方よ。また汝はどこへ行くのか、美しき方よ。』

シュリーは言った。

(19) 三つの清浄な世界において、動くもの動かぬもののすべては、私の本性を得ようと望みつつ[75]、最大限の[76] 努力している。

(20) 私は、太陽の光で目覚めた蓮の中で、あらゆる生き物の繁栄のために生れた。私は、蓮であり、蓮を花輪とするシュリーである。

(21) 私は吉祥の女神であり、繁栄の女神である。私は幸運の女神シュリーである、バラを殺せし者よ。また私は、信仰であり、英知であり、謙虚であり、勝利であり、安定である。

---

[67]dhruvadvārabhavāṃ gaṅgāṃ Ca. dhruvadvārabhavāṃ [dhru]vasthanārāyaṇapadyaṅguṣṭaprahavhavām Cp. śrīviṣṇupadāt dhruvadvārāt prāptām Cs. dhruvadvāravahāṃ dhruvanakṣatramārgagāminīm ākāśagaṅgām Deussen: zu der aus dem Felsentor hervorbrechenden Gaṅgā Ganguli: as she (Ganga) issued out of the pass known by the name of Dhruva cf. 中村 [1998] pp. 262, 581.

[68]P. samāsatuḥ D. samāsataḥ

[69]P. kathāśīlau śucisaṃhṛṣṭamānasau D. tathāśīnau maharṣikathitās tathā

[70]puṇyakarmabhir ākhyātā Ca. puṇyakarmabhiḥ bharatabhgīrathādibhiḥ kathānāyakair hetubhir ākhyātāḥ pravartitāḥ

[71]P. suparṇārkacaritam D. suparṇārkaracitam

[72]vaiṣṇavaṃ padam Ca.,Cp.,Cv.: vaiṣṇavaṃ padam ākāśam

[73]P. tārābhaktisamasrajam D. tāṃ bhauktikasamasrajam

[74]P. trilokeśaṃ śakraṃ carṣiṃ ca nāradam D. trilokeśaṃ devarṣiṃ cāpi nāradam

[75]mamātmabhāvam icchanto Hara: to win association (*ātma-bhāva*) with me (Hara[1996], p.39)

[76]paramātmanā Cv. paramātmanā paramaprayatnena Hara: with their whole hearts (Hara[1996] p.39)

(22) 私は、堅固である。私は、成就である。私は、美であり、繁栄である。私は、スヴァーハー音であり、歓喜 (svadhā) であり、称賛であり、運命 (niyati) であり、完成である[77]。

(23) 勝利しつつある王の軍勢の先端に、そして (彼らの) 旗の中に、ダルマに専心する者の住居の中に[78]、そして (ダルマに専心する者の) 物の中にも、城砦の中にも、

(24) 勝利者のごとく振る舞い、戦闘において退却しない英雄の中に、そして、人の王の中にも、常に私は住んでいるのである、バラを殺せし者よ。

(25) ダルマを常とし、偉大な理性をもち、真実を語り、中庸にして、布施を好むバラモンにも、私は常に住んでいるのである。

(26) 私は、真実とダルマに基づいて、かつてはアスラの中にも住んでいた。(cf.Gonda[Aspects] p.194.7) しかし、彼等が背いたのを知って、汝のところに住むのを望んだのである。

インドラは言った。

(27) いかなる振る舞いをするダイトヤの中に、汝は住んでいたのか、美しい顔をもつ方よ。汝は何を見て、ダイティヤとダーナヴァを捨て、ここに来たのか。

シュリーは言った。

(28) 自己のダルマ（義務）を遂行し、堅固さから逸脱せず、天界への道を喜ぶ善き彼らのところに (sattveṣu)、私は留ったのである。

(29) かつて彼らには、布施、ヴェーダ学習、祭式、供物、師匠と神々にする尊敬[79]、賢者や[80]客に対する (尊敬) が常に[81]あった。

(30) (彼らは、) よく家を清浄に保ち、女 (への思い) を制し[82]、火に供物をささげ、師匠に従順で、己を制御し、バラモンらしく、真実を語り、

(31) 祖先を祭り、怒りに打ち勝ち、寛大で悪意なく、子供を養い、同居人を養い、妻を養い、羨みなき人々であった。

(32) (彼らは、) 短気となって (?)[83] 互いを妬むことはない。また (彼らは) 思慮深く、他人の繁栄によって苛まれることもない。

(33) (彼らは、) 布施者であり、(秩序の) 維持者であり、高貴にして、慈悲を知り[84]、非常に寛大で、正直であり、確固とした信仰をもち、感官を制御し、

(34) 満足した使用人や友人をもち、知恵は完成し、好き言葉を語り、(人々をそれぞれに) ふさわしい仕方で尊敬の対象とし[85]、恥を遠ざけ[86]、誓約を守ったのである。

(35) (また彼らは、) 常に、節目となる祭日にはよく沐浴し、よく香を塗り、よく荘厳し、断食と苦行を好み、確信をもち、てブラフマンについて語ったのである。

(36) 太陽は、これらの人々(が寝ている間に) 昇ることはなく[87]、また彼らは早朝を夜のごとく寝ている[88]こともなかった。そして夜は、いつもヨーグルトと荒挽き粉を避けた。

(37) (彼らは、) 夜明けにはバターを吟味し、自己を制し、梵行を行ない、吉兆を見、バラモンたちを礼拝することもしたのである。

---

[77]P. kṛtiḥ D. smṛtiḥ
[78]nivāse Ca. nivāsī nivāsinī
[79]P. gurudaivatapūjanam D. pitṛdaivatapūjanam
[80]P. viprāṇām D. gurūṇām
[81]P. nityam D. satyam
[82]jitastrīkāḥ Cs. jitastrīkāḥ anuguṇakalatrāḥ Deussen: beśaehmten das Verlangen nach Weibern
[83]P. amarṣaṇā D. amarṣeṇa D. の読みの方がわかりやすい。
[84]karuṇavedinaḥ Ca.,Cp.: karuṇavedinaḥ sakaruṇacittāḥ
[85]P. yathārthamānārthakarā D. yathārhamānā-
[86]P. hrīniṣedhā D. hrīniṣevā Ca.,Cp.: hrīr akāryābhivṛttiḥ saiva niṣevo yeṣāṃ te hrīniṣevāḥ
[87]abhyudiyāt Monier: *abhyudita* one over whom (while sleeping) the sun has arisen Deussen: überraschte Ganguli: The Sun never rose upon them while they lay asleep.
[88]P. prageniśāḥ D. prageśayāḥ Ca.,Cp.: prageniśāḥ prātar dine niśāḥ

(38) 常に布施を行ない[89]、常に受領せず、夜の半分を寝て[90]、昼間眠らぬ彼らにダルマは[91]あったのである。

(39) 不幸な者、寄るべなき者、老人への[92]、そして、力弱き者、病気の者、女たちへの贈与と配分を[93]常に喜ぶ彼らに（、ダルマはあったのである。）(cf. MBh.XII.78.18, 87.24; Agni Purāṇa 225.25, Matsya Purāṇa 214.61)

(40) 悲しむ者、震える者、落胆した者、恐怖に襲われた者、病気で苦しむ者[94]、財産を奪われた者、災難に襲われた者を、常に彼らは慰めていた。

(41) 彼らは、ダルマのみを行ない、互いを傷つけることはなく、為すべきことに従い、師匠と長上に仕えたのである。

(42) 彼らは、祖先・神々・来客を適切に礼拝し、残り物を食べ、常に真実と苦行を喜んだのである[95]。

(43) 彼らは、ご馳走を自分だけで食べることはなく[96]、他人の妻に近づくこともなかった。あらゆる生き物に対して、自分に対するかのように、慈悲をもって[97]振る舞ったのである。

(44) 彼らは、虚空にも、家畜にも、子宮でないところにも[98]祭日にも、決して精液を放出 (indriyasya visargaṃ) しようとはしなかった[99]。

(45) 絶えざる布施、賢明さ、常に正直であること、精進、利己的でないこと、この上なき友情、忍耐、

(46) 真実、布施、苦行、清浄さ、慈悲、言葉の柔和さ、友人たちを侮辱せぬこと、これらはすべて、彼らにあったのである、威光ある者よ。

(47) 眠気、怠惰、不満、利己性、怒り、配慮なきこと、不平、失意、そして羨望は、彼らに入り込むことはなかったのである。

(48) かくして私はかつて生き物を創造して後[100]、数ユガが経過する間、このような特質をもつダーナヴァたちの間で住んだのである。

(49) それから、時が経過するうちに彼らの特質 (guṇa) は変化し、欲望と怒りに支配された人々からはダルマは失われるのを[101]私は見たのである。

(50) 集会に座した長老たちが語る真実の言葉を、彼ら特質の劣った者たちは笑い、そしてあらゆる長老の名誉を汚したのである (abhyasūyaṃś ca)。

(51) 一緒に座っている若者たちにも[102]、近付いて来る長老たちにも[103]同様に (sataḥ)、(彼らは、) かつてのように、起立と挨拶によって敬うことをしなかった。

---

[89]P. dadatāṃ D. vadatāṃ

[90]ardhaṃ ca rātryāḥ svapatāṃ Ca. ardhaṃ ca rātryāḥ svapatāṃ, prathamapaścimayāmayoḥ jāgratāṃ, svādhyāyāvaśyakādyartham

[91]P. dharmaḥ D. dharmaṃ

[92]kṛpanānāthavṛddhānāṃ Deussen: gegen Elende, Schutzlose und Alte, Schwache, Kranke und Weiber 「哀れな寄る辺ない老人」か。(京大人文研共同研究井狩班「インド文化史の諸問題」レジメ MBh.XII.78.18, 87.24 の和訳参照)

[93]P. dāyaṃ ca saṃvibhāgaṃ ca D. dayāṃ ca saṃvibhāgaṃ ca saṃvibhāga については Manu Smṛti 4.32 参照 (京大人文研共同研究井狩班「インド文化史の諸問題」レジメ (1998 年 5 月 8 日) 井上信生氏担当 p.7 の指摘による)。

[94]P. vyādhipīḍitam D. vyādhipīḍitaṃ kṛśam

[95]P. satyataporatāḥ D. satyatapodhṛtāḥ

[96]naike 'śnanti susaṃpannaṃ Hopkins: "eat dainties alone"(Hopkins[1902]p.118)

[97]dayāṃ prati この prati の意味は、'gemäss' あるいは 'mit Beziehung auf' であろうか。cf. Delbrück, Altindische Syntax, Darmstadt, 1976, pp.463-464.

[98]P. nāyonau D. viyonau

[99]P. te 'rocayanta D. te rocayanti

[100]prajāsargam upādāya Ca. prajāsargam upādāya prajāsṛṣṭim ārabhyādya yāvat

[101]P. vigataṃ D. nirgataṃ

[102]P. yūnaḥ sahasamāsīnān D. yuvānś ca samāsīnā D. のように、「若者」を主格とするならば、「若者は座ったままで、長老が近づいて来ても敬わない」という意味になり、理解はしやすい。

[103]P. abhigatān D. api gatān (apigatān)

(52) 息子たちは、父の面前で、自分の力をもって[104] 振る舞い[105]、敵の従者となって[106]、恥知らずにも、(父を) 非難したのである[107]。

(53) そして、ある人々がダルマからはずれた禁じられた行為によって大きな財産を獲得すると、彼らにはその人達に対して[108] 羨望が生じた。

(54) (彼らは) 夜声高に話し、そこでは低く祭式の火が燃えている。息子たちは父の名を呼び[109]、妻たちは夫の名を呼んだのである[110]。

(55) 母にも、父にも、長老にも、教師にも、客にも、師匠にも[111]、尊者に対してするように[112]挨拶しなくなり、また幼児を守ることもしなくなった。

(56) 施しとして供物を与えることなく[113]、祭式を行なわずに祖先・神・客・師匠に配分して[114]自ら食事をとるのであった。。

(57) そして彼らの料理人たちは、清潔さを好まなかった。(彼らの) 食べ物が (料理人の) 心によって、行為によって、言葉によって[115]包まれたことはなかった。

(58) 散乱した穀物は、カラスとネズミが食べ、牛乳は、開けたまま置かれ、そして (人々は) 食後手を洗わぬまま (ucchiṣṭāś ca)、祭式用のバターに (手で) 触れたのである。

(59) 鋤、鎌 (?)、布切れ[116]、銅の器、ものを作る道具 (dravyopakaraṇa)、これらすべてが散らかっていても、家長の妻は注意を払わなかった。

(60) (人々は) 壁や家が破損しても修理しなかったし、家畜を繋いでも、牧草や水で (飼料の) 世話をしなかった。(第２２１章未完)

(1999年12月15日　受理)

---

[104]P. prabhavatātmanaḥ　D. pravartate tathā　Ca. yathā ātmanaḥ prabhavaḥ [ovantaḥ] kecit kāṃścid bhṛtyādīn prati ācaranti, evaṃ putrāḥ śāstradṛśā aprabhavo[vanto] 'pi vartayanti / prabhava[taḥ] iti nalopaś chāndasaḥ, evam ākāre 'pi tattvam

[105]P. vartayanty eva D. vartayaty eva

[106]P. amitrabhṛtyatāṃ prāpya　D. abhṛtyā bhṛtyatāṃ prāpya

[107]khyāpayanto　Ca. khyāpayanto, vayam etat sevayā samṛddhāḥ smeti

[108]P. teṣv eṣām　D. teṣāṃ tatra

[109]P. abhyavadan　D. atyacarann

[110]P. cābhyavadan　D. cātyacaran

[111]ここには、教師 (ācārya) と師匠 (guru) が並列されているが、両者の性格の相違は、ācārya は、「学問的、客観的、冷静」なのに対し、guru は「宗教的、主観的、温容」であることが指摘されている。詳細は、Hara[1980] 参照。

[112]P. guruvan(d)　D. gurutvān(t)

[113]bhikṣāṃ balim adattvā　Cs. balim adattvā śvaśūkaracaṇḍālādīnāṃ balim adattvā

[114]「配分せず」の方がわかりやすい。D. はそのように、すなわち asaṃvibhajya と読んでいる。

[115]manasā karmaṇā vācā　Ca. manasā vāceti dvayopādanamanācaraṇe bhaktasya pratyavāyaśaṅkāpi teṣāṃ nāstīti jñāpanārtham

[116]P. kuddālapāṭīpaṭakaṃ　D. kuddālaṃ dātrapiṭakaṃ　Cs. (reading piṭakaṃ) piṭakaṃ bhojanapātrādhāraṃ mṛnmayaṃ pātram /　pāṭī の語義不詳。「算術」では文脈に合わない。語根 paṭ (to split) からの派生語としての意味を類推し、「切る道具」と考えた。D. の読みならば、「鎌、篭」となり、わかりやすい。